



図書館司書だより

札幌市立琴似中学校

学校図書館司書

林 真知子

第19号 2020. 3. 5

今年度最後のおたよりとなりました。これを書いている時はちょうど新型コロナウイルスの感染拡大を防ぐための臨時休業日でした。3年生はいよいよ卒業ですね。おめでとうございます。早く皆で明るい春が迎えられることを希望します。

そして、3月は別れの月でもあります。でも、これから何か新しいことが始まるといった希望に満ちあふれた月でもあると思います。そんな思いが込められた詩を送ります。

今日からはじまる

高丸もと子

あなたに会えてよかった
空が青く
大きいことも
あなたがいて気づいた
この光もいま届いたばかり
一億五千万キロのあなたから
今日からはじまる
何かいいこと

みんなに会えてよかった
すてきなものが
そばにあること
みんながいて気づいた
いまもどこかで命が生まれる
子犬も小鳥も草の芽も
今日からはじまる
何かいいこと

わたしに会えてよかった
胸の鼓動も
ときめきも
わたしがいて気づいた
だれも知らない音だけど
わたしの殻をやぶる音
今日からはじまる
何かいいこと



(『中学生と読みたい101の詩』より)

=最後に、おすすめの短編小説をご紹介します=

ちょっと難しいかもしれませんが、卒業する3年生にも、1、2年生にもこれからいつか読んで欲しいなと思う本を紹介したいと思います。短編小説は読みやすく、でも、短いなかに作者の心理や内容が凝縮されています。皆さんが知っている作家の作品ばかりです。ぜひ、いつか手に取って読んでみてください。図書館の「ちくま文芸文庫」にもいくつか収められています。

★宮本輝編『魂がふるえるとき』（文春文庫）

作者がかつて愛読し、魂を揺すぶられた16の短編小説を選んで編集したものです。以下の名作が収められています。◎は特に、私が読んで奇妙で、不思議な世界が描かれていておもしろいと感じたものです。が、いずれも繊細で美しい作品ばかりです。

◎川端康成『片腕』

ある一人の男「私」が、美しい娘から一晩だけ借り受けた「片腕」と過ごす、妖しい夜を描いた幻想的な作品。

◎川端康成『有難う』

作者の26歳の時の作品。人力車、馬車の馬にまで「有難う」と言う、「有難うさん」というあだ名のバスの運転手と娘との関係が悲しく切なく描かれる。人生の底辺で生きる娘はやがて町へ売られていく……。

○永井荷風『ひかげの花』

○国木田独歩『忘れえぬ人々』

◎水上勉『太市』

「女郎蜘蛛」という生き物を買う主人公（ぼく）との関係を描いたもの。強いものへのあこがれと、「ぼく」という弱いものとの関係がせつなく、もの悲しく語られる。また、一方で、怖ろしさも感じられる作品。

◎泉鏡花『外科室』

一人の医師が伯爵夫人の手術を始めようとするが、夫人には心に秘密があり、麻酔で朦朧（もうろう）となって秘密を漏らすことを恐れて麻酔を拒む。医師はやむを得ず麻酔なしで手術を始める。その結果……。

○永井龍男『蜜柑』

○幸田露伴『幻談』

◎武田泰淳『もの喰う女』

◎尾崎一雄『虫のいろいろ』

闘病中の「私」によって観察された蜘蛛やハエや蜂などの小動物の習性や生命力と「私」の心境を重ね合わせて生と死についての深く考えさせられる作品。

○安岡章太郎『サアカスの馬』

○堀田善衛『鶴のいた庭』

○開高健『玉、砕ける』

○吉行淳之介『不意の出来事』

★川端康成『掌（てのひら）の小説』（新潮社）

川端康成は皆さんが知っている有名な『伊豆の踊子』や『雪国』という作品以外に、たくさん短編も書いています。これは作者の40年間の作品を集めた一冊です。この中には122編の短編が収められています。単純な文章の中に深い意味をもたせているものも多いので、じっくり読んで欲しいものです。『骨拾い』『化粧』『落日』他

★寺田寅彦『寺田寅彦随筆集』（第1～5集）（岩波文庫）

作者の芸術的で、鋭い科学的見地からみた珠玉の110余編の随筆集。
休校措置によりこのおたよりの発行日とお届け日にズレが生じることをご了承ください。